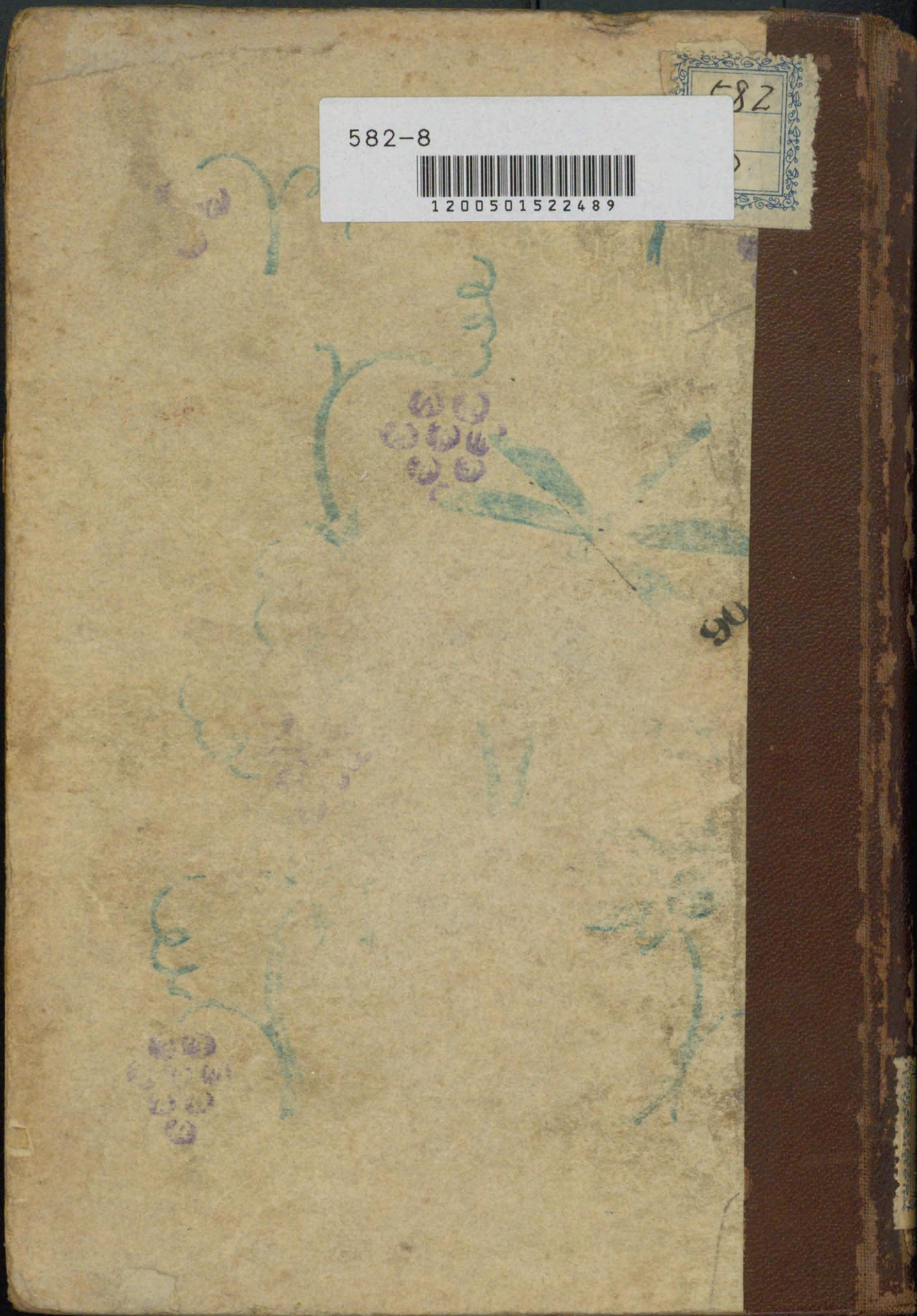


582-8



582











吉井勇著

蜻

(たまかぎろ)



東京

交蘭社發行



582-8

歌集玉蜻

吉井勇



目次

✓癡 夢……………三  
✓夏のおもひで……………三五  
✓酒ほがひ……………五五  
✓わかうど……………七五  
✓後の戀……………八七  
昨日まで……………一〇三  
浴泉記……………一六一  
片戀……………一七一

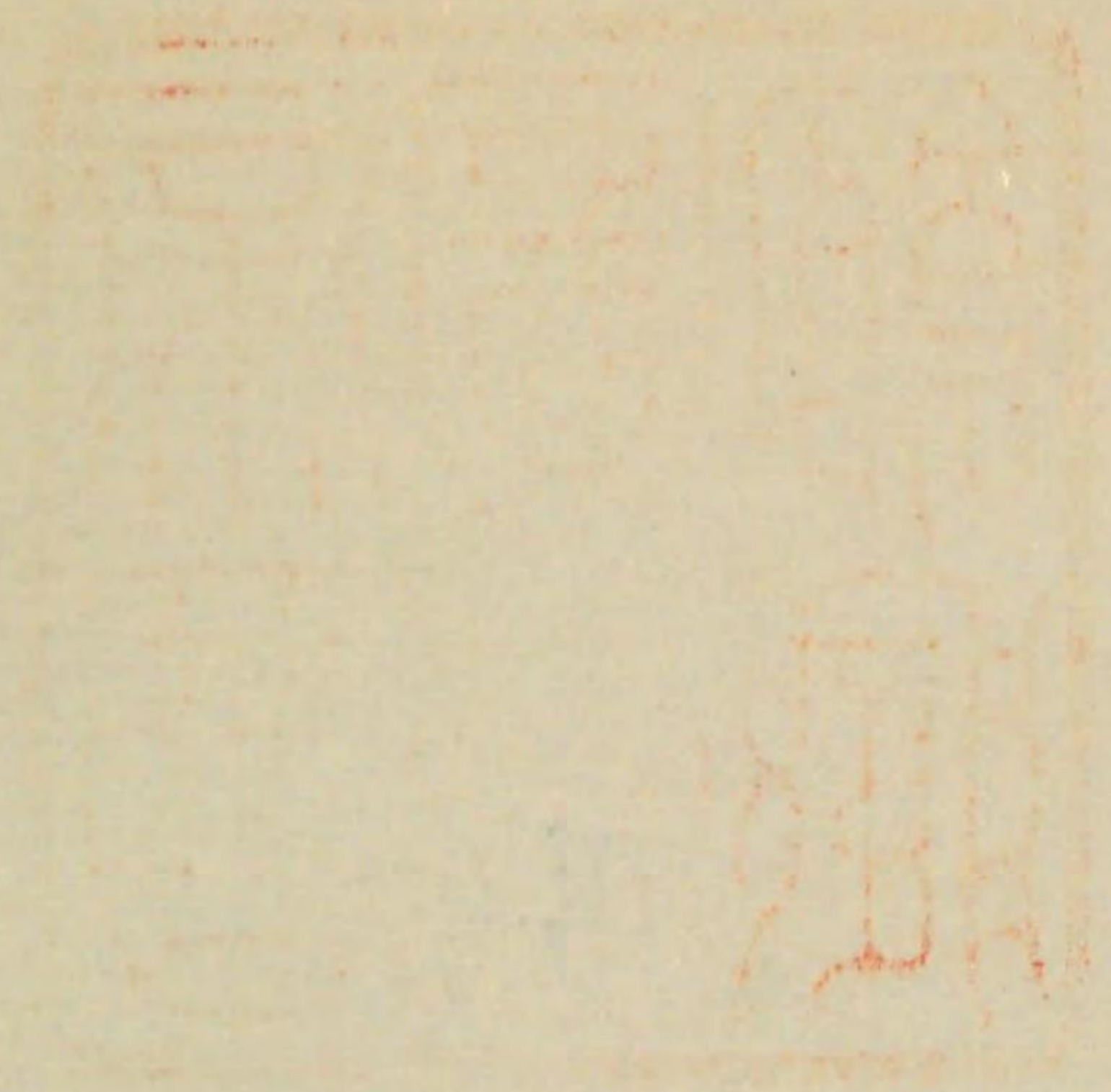
逃 亡……………二五  
紅 燈 行……………三九  
鎌倉浄土……………七九  
多情多恨……………九七  
祇園の夢……………一一一  
馬樂・紫朝・小せん……………一五九  
旅 情……………一七三



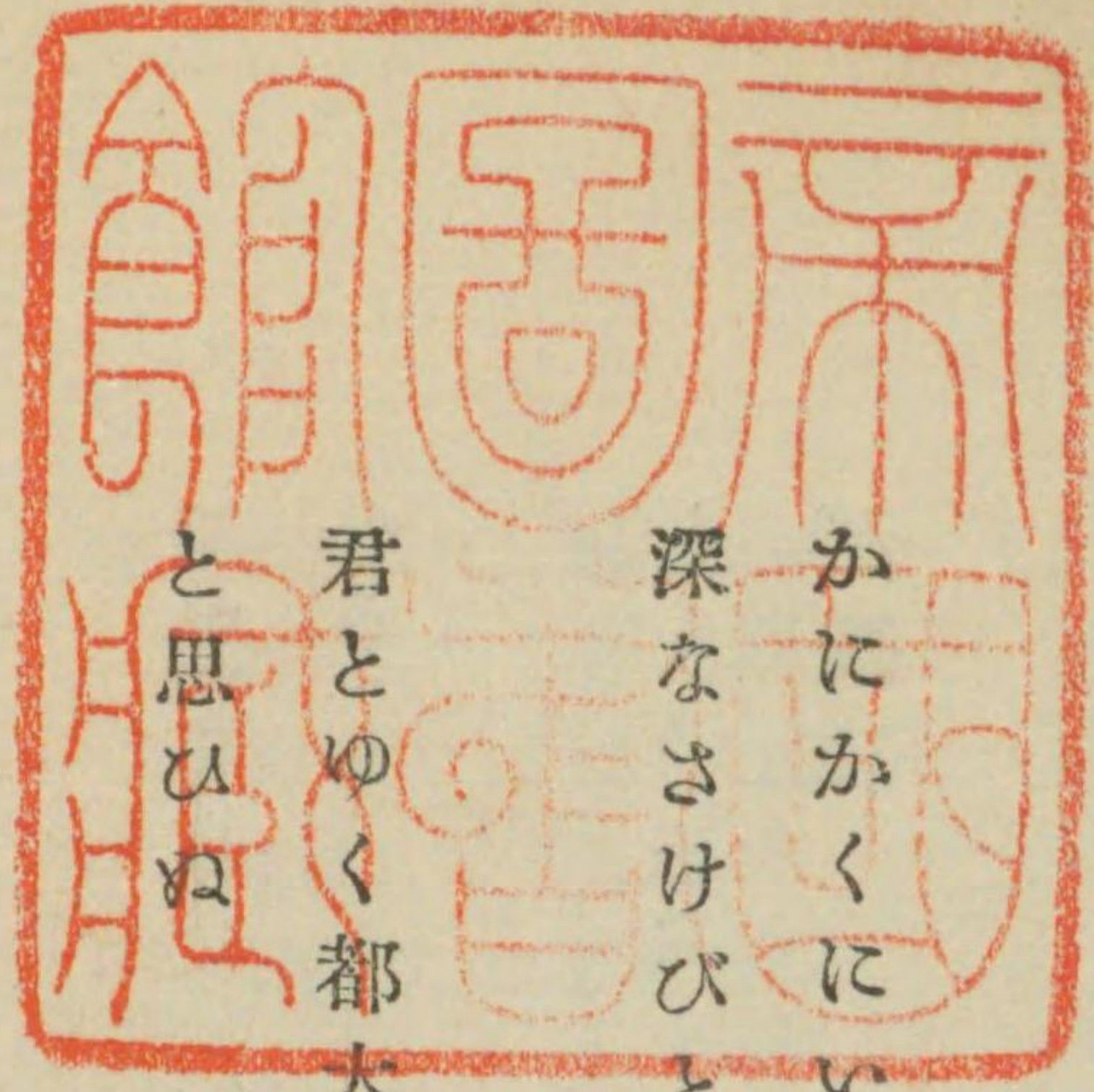
玉

靖





癡 夢



かにかくにいとにこやかに親しみぬ薄なさけびと  
深なさけびと

君とゆく都大路のただなかの忍びありきををかし  
と思ひぬ

相ゆきぬ戀おほきごとかたる子と初戀のごとよそ  
ほへる子と



おとろへよ顔蒼ざめて今日もあれかくのろひたる  
君ならなくに

黒髪は夜にかたどりてつくられぬおん顔は晝にか  
たどる

七人の子がうつされてありしごとわれ映されぬ君  
が腫に

夜もすがらかくさまよひてあるもよしこのまま家  
に歸らぬもよし

狂ほしき男のころしづまれと吒た枳き尼にの法ほす女の  
ために

鳥羽玉うはたまの夜のくらやみに奪とられよと冷たき手をば  
放ちけるかな

伴ともひぬ黒曜石くわいせきのきだはしにひとおそろしき夜の館やかた  
に

君おもふ子なれどをかし或るときは囊家のうかに入りて  
骰子さいしなげしかな



あら潮を南へくだる海客のすがたとわれを見たまふもよし

もの足らずわれになずらひうち笑ひわれになずらひうち歎くゆゑ

戀びとは都のなかをさまよひぬ相ただずむに鐵橋もよし

あまりにもあかるき晝をさへぎると君が衣を帳にするも

くちづけを禁ぜられたる戀人はひと日ひと日にとろへにけり

目閉づればかならず君のまぼろしがうかび來るてふ吉祥のひと

君がかぜあはれ眞晝の黄蠟もうちしめるまでかなしげに吹く

かなしみと云ひがたきほどのかなしみに微かに顫ふわれの心か



君かなし悵然としてうなだれしポオドレエルの横  
顔よりも

いかにせむ君は男の外套を遂に脱がざるかなしき  
少女

唇は木の實のごとく甘ければ朝にたうべ夕にたう  
ぶる

よその子を思ひうかべてある時と知らでわれ凭る  
君が腕に

樂欲の泥犁にさそふまよはしか戀の蘭若にさそふ  
少女か

七人の男のことをかたるひと七度棄ててかへりみ  
ぬひと

いくたびか棄てむとしつれかにかくにそのつれな  
さを忘れかねつも

うたがひは劔となりて君にゆく眞白き床のあかつ  
きのころ



饗宴のただなかにして君おもひ心にはかに寂しく  
なりぬ

いつのまにかくいぢらしき手弱女たぢめとなりけるか  
と君を思ひぬ

くちづけを七度すればよみがへる戀と輕んじくち  
づけをする

たたかひの猛者まうにならひてわが君の唇にしも走り  
ける子ぞ

涙落つはじめて人を思ひぬとそらぞらしくものた  
まふ聲に

木がらしに耳かたむけぬ遁れゆく君が心に聽き入  
るごとく

七年のあひだ君をば思ひぬとこよひはじめて打ち  
明けしかな

片意の物と思ひのやまをなす

いくたりの男のために取られたる手かは知らねど  
われも取りたる



その君を憎むはやがてその君を戀ふにひとしと聽きてにくみぬ

ふと君がさむき腕に觸れしより多情多恨の子となりしかな

嵐よりやややはらかに胸をふくねたみにまさる趣おもむきはなし

蛇いちごほのかに赤しその君のその唇は吸ふよしもなし

頼なき腫に射られわが胸はいとかすかなる痛みおぼゆる

沈みたる昨日の君のかほばせをな思ひそと獨語ひとりごとするかな

その夜また身に染いむことを君に聽く沈丁花にも似たるたをやめ

かなしみを抱くがごとき心地してその夜君をば抱きけるかな



とこしへに覺めざる人と戯れぬ心ふたつを弄びつ  
つ

われ生る君なほあらずわれ長ず君ありすでに戀人  
として

われを思ふこれ囚はれし夜半よなの身かはた放たれし  
曉あけの身か

風のごととらへがたなき君を追ひあはれ幾たり空  
しく歸る

胸すでに惡の時ときのつくられしいつはり人に思はれ  
しかな

君なかば人に奪はるいかにせむなかばやうやくわ  
れ守れども

半身はひだりの君に半身は右の少女に與へけるか  
な

色變へて何におどろくわが少女せうじゆ覺めよと蛇へびの聲を  
聽けるや



いくつにか君が面影裂けぬると見てまぼろしにお  
どろきしかな

過ぎし日にたづねず來る日に問はずただ今日のみ  
求むる君よ

よろこびをよろこびとせず悲しめるかかる少女を  
かなしむと云ふ

いたましき戀は糧にも足らざらむ貧しき心持ちた  
るひとに

唇は乾き肉むらいたづらに枯れゆく日なり君に凭  
らねば

君を見て近まさはた近をとりわかぬわが身とな  
りにけるかな

胸狭し三人を容れずいかにせむとは云へ心おほら  
かにして

胸のなか争ふ聲におどろきぬ誰そ誰をしも追はむ  
とすらむ



愚かにもともに死なむとかねごとすこの世にかか  
る戀のあらぬに

傍かたはらのつれなしびとは遠方とちかたのめでしれびとに及ばざ  
るかな

姦かたましくなに囁るとわれ問ひぬ黙するときなき鳥の  
少女に

また今日も少女を獵かると來りしや戀のさつをのわ  
かうどの友

のろはれぬ銃づつの煙のまぼろしのなかにまさしく戀  
の敵見たき

金曜に船出を忌むと云ふごとく霰降る日に相會ふ  
を忌む

われなくも安寝やすみしおはせおごそかにかの大空は君  
を護らむ

大空はかぎりもあらぬ眼まなこもてわれらを眺む秘めが  
たきかな



君興ずわがかなしみを知らぬごとながき別れの日  
と知らぬごと

泣く少女笑ふ少女と二人あるごとくに變る君なり  
しかな

顔なかば隠すがごときいぢらしき少女なりしは七  
年のまへ

切支丹きしたんその信徒らを見るごとく思はれびとをさは  
な眺めそ

われは見ず君ひとり見るおそろしき戀の秘密を覗  
かむとする

この日頃君がつたなき虚言たそごに欺かれしを思ひ樂し  
き

楯を持つ男と楯を持つ女かたみに思ひ合ふがをか  
しさ

黒髪が錨綱より強きこと君にをしへて歸りけるか  
な



世のつねの女とかはりくちびるの冷きを愛で君を  
吸ふかな

君に聴く蛇へびの少女の夢がたりはた蝮はまの子の戀もの  
がたり

ただひとつ君はたうとし得がたかり男と遊ぶたは  
むれを知る

君は憂しその夜はやくもくちづけを怖るるごとく  
顫へたまひぬ

かりがねは空ゆくわれら林ゆく寂しかりけるわが  
秋もゆく

悲しみぬ戀ふべからざる人を戀ひありけるわれと  
思ひ知る時

涙あまし悲しむことをよろこぶと歎けばいつか秋  
も終りぬ

思はじとかくてみづから欺きぬ断たむとしたる淺  
き心に



何處どこにかつれなしびとを葬らむ呪咀のろひなげきを一列  
にして

笑めばみな男はまへに伏すものとなほも思ひぬ覺  
めざる少女

衰へしとなほも知らざる君見ればああ冷笑ぞ頬ほに  
のぼりぬる

その君はかいなでびとの言葉にも笑あはをむくいぬ情なさけ  
あるかな

そのなげき遂にわが身を枯らすべき日あるを思ひ  
涙するかな

異なりぬむかし會ひしは人の少女いま別れしは獸けもの  
の少女

蛇の子はいづこへ歸る行く方もなしと思へば涙な  
がれぬ

ああながく戀失ひし闇のなか歎歎なげきする人を誰とわ  
かたむ



歎きつつ三年のまへの相知らぬふたつの世へと別  
れて歸る

戦慄すかへりみすれば幾年は惡に隣れる戀なりし  
かな

君かかる寂しき人を選びしがあやまちなりとわれ  
は別れぬ

求めたまへ放縱にて厭く知らぬ君が心を満たすべ  
き子を

あざけりは君見て胸におこりたる思ひのひとつ心  
をかしき

君見ればなほもうつくし幾年の齡わづかに身を枯  
らせども

君われに背きしうしろ姿こそやがて負ふべき墓と  
見えけれ

相會へばむごき少女はひややかに道行く人のごと  
くわれ見る

思ひつゝ、あまのこがゆつゝ、三年を君に見ゆは  
あやかしに



されどなほ思ひぬわれに泣かぬゆゑ獸に墮ちしあ  
はれなる君

胸ふたつ脆くつくられ地にあり碎けむとするなげ  
きの夕

また戀の無殘なる手にとらはれむ身と思はねばま  
る寢しにけれ

自らの戀をみづから知らずして誰があさましき戀  
かと云ひぬ

かへれとは何處よりする叫びかとかへりみすれど  
人影もなし

わが泣くを冷やかに見てゆき過ぎぬ蝸の君やくち  
なほの君

思はずとひそかに云ひしわが聲の高かりしにも驚  
かれぬる

身は枯れぬいまこの戀の最後をば弔はむにも涙な  
きかな



かへりみて胸こそ顛へ歴つる日をおごそかにせし  
戀のちからに

戀の埴<sup>は</sup>數あるなかのひとつとも棄てられ人を眺め  
けるかな

かなしみに心は舵をうしなひぬ南を北としてたど  
りゆく

ただひとつ心の奥のこの秘密あかさず別る憾<sup>あは</sup>みな  
るかな

君を思ふしかはあれどもわれを思ふこの思ひより  
戀は破るる

君來らず砂を數ふるおろかさ<sup>あ</sup>に日をば數へてかな  
しみしかな

君ゆきぬ後に曳ける丈長<sup>たけなが</sup>の髪なつかしく涙すれど  
も

手を取ればいつしか石と君なりぬこの時惡夢<sup>あくむ</sup>破れ  
けるかな



君と別る紅かより藍あにうつりゆく心の色の目にうつ  
る時

君を棄つまた見る時のあらむやと猛者ものごとくに  
振舞ひしかな

戀びとはあさましきかな別れては仇のごとくその  
君を云ふ

うらめしと繰りかへすこと三度して君は別れぬた  
をやめのごと

怖ろしき思ぞ胸にうかび來し君を殺さばかなしみ  
なからむ

このうへの君が歎きを見ざるため海に往なむと思  
ひ立ちにき

おとろへし君が姿をあざみたる笑消ゆるとき涙な  
がれぬ

今日なれどなほも昨日きのふのわれを見るころ昨日に  
残りしゆゑに



つれなくもわれを疑ひあまつさへわれをのろへる  
荆棘の少女

生と死のあひだを辿りやうやくに來ぬればいつか  
君のおはさぬ

夏のおもひで

夏は來ぬ相模の海の南風にわが瞳燃ゆわがこころ  
燃ゆ

夏の帶砂のうへにながながと解きてかこちぬ身さ  
へ細ると

君がため瀟湘湖南の少女らはわれと遊ばずなりに  
けるかな



八月の避暑地の街のゆふまぐれひとりはかなく酒肆しやうに入る

赤き旗高くかかげし玉突場海へまがれば君が窓見ゆ

自墮落の身を砂の上によこたへぬ信天翁しんてんおうと誰か名づけし

君が家の走りづかひの下男しもやうこあまりみにくき文使ひかな

友ありき禁衛軍の服を着て己がもののごとわが君を云ふ

滑川いくたび君の手を取りて夜半よはんの水を渡りける子ぞ

君が間に接吻せつぶんのほひはただよひぬ今人來いまなば何と云ふらむ

砂山は墓のごとくにきづかれぬ君の墓なりわれの墓なり



海風は君がからだに吹き入りぬこの夜抱かばいかに涼しき

草枕砂まくらしてものがたる男女おとこをんなをさはなとがめそ

砂山に追放の客のすがた見ゆあはれわが目にわが姿見ゆ

わが耳に夜がささやくと疑ひぬかたはらにある君を忘れて

君に似しとづくにびとの少女住む江の島道の向日葵あひまの館たもと

戀びともうすきころもを身にまとひ朝逍遙す夕逍遙す

濱涼み都より來し少女らのゆかたなまめく夜となりしかな

新しき夏のかをりのただよへるなかをさまよひ往きぬ吾等は



船大工小屋の戸口にあらはれてわれらを笑ふ書顔  
の花

かの友は何を思ひて君が家の戸をたたきしや夏の  
夜半に

思はずといと冷やかに云ひはなち猛然として獅子  
窟に入る

鶴が岡八幡宮のいしだんの十級にして疲れたるひ  
と

笛吹くは誰が莊園を守る子ぞあはれを添ふる戀の  
わかれぢ

君が窓海鳥玻璃にあたる時つと離れたるわれなら  
なくに

秘むべきは夏のゆふべに裏山の窟のなかにもな  
ひしこと

わが住みし山寺の縁にぬぎすてし君が草履にこぼ  
ろぎの鳴く



砂濱の船に腰かけ君に聴く戀ものがたりあはれなるかな

君が家のまへを通るもはばかりぬ鎌倉びとは口のさがなし

隠しぬひとりひそかに忍び來て君が夜戸出を待ちたることも

月夜よし七里が濱の水際の白く顫ふを君とながむる

藻を拾ふ少女の言葉「このごろはかのわかうどのよく歌ふこと」

土蜂のうなりを聴きてわれは寢る戀ものうく砂山に寢る

鳥のごとおほくの人とはたはむれぬ鷺のむすめの君もまじれる

うすぐもり涙のいろに海見ゆる涙のいろに砂原見ゆる



君とわれ夜半の二時ごろ八幡の石の鳥居の臺に憩  
ひぬ

鎌倉の扇が谷の山莊に朝のわかれを惜しみけるひ  
と

うなだれて海邊を歩む漂泊者そのごとくにもわれ  
の歩める

鎌倉の少女の群がもてはやすそのみやびをと云ふ  
は誰が子ぞ

砂山に來よと書きこす君が文數かさなりて夏も終  
りぬ

海に入り浪のなかにてたはむれぬ鱧の廣もの狭も  
の等のごと

ましぐらに砂丘をくだり海に入るからくも君が手  
より遁れて

ねむるもの赤き蜻蛉とわが君と濱防風に眞白き砂  
に



わが少女ふるふ險に涙してただかなしげに海を見  
まもる

恨みつつしづかに涙ながす子にまたも思を寄せに  
けるかな

遠空のいなづま見ればその宵の玻璃窓の外を思ひ  
出づと云ふ

もろともに鎌倉憂しとぬけ出でぬ君や誘ひしわれ  
や誘ひし

その少女舞姫に似る帯をして厚おしろいの暑かり  
しかな

砂の上の文字は浪が消しゆきぬこのかなしみは誰  
か消すらむ

伊豆も見ゆ伊豆の山火も稀に見ゆ伊豆はも戀し吾  
妹も子のごと

君はいま眞晝の砂のかがやきに目や眩みけむわが  
肩に凭る



朝ごとにかならずおなじ濱邊にて會へば笑ひてゆ  
く少女あり

身に染みぬその夜の海の遠鳴も鷗のこゑも君がな  
さけも

われらゆく岬の色の黄なる時眞晝の月のすさまじ  
き時

藻のかをり四邊をこめぬ黒髪のにほひよりやや淡  
けれどよし

その夜半の十二時に會ふことなどを誓へど君のう  
すなさけなる

朝の海昨夜の嵐の名残りより昨夜の少女のなごり  
を思ふ

ひと夏は情を盗むかたきとも知らでわが頬を寄せ  
にけるかな

あながまとかろく呟き君去んぬたはれをどもの群  
がるなかを



なでしこや大佛道の道ばたに君の棄てたる貝がらの咲く

くれなゐの薔薇きょうびのなかに倒れ伏すごとくに君は砂にまろびぬ

草土手を蜥蜴はしりぬわが君の足の音にもおどろくものか

悲しげに海邊の墓のかたはらのなでしこを摘みかへりたまひぬ

或る朝のそぞろありきに拾ひたる櫛ゆゑ心みだれけるかな

葦の葉の鳴るがかなしき日となりぬ河邊に立ちて君を思へば

滑川越すとき君は天の川白しと云ひてあふぎ見しかな

海出でて酒場に入ればわが椅子の主待ち顔にあるがをかしさ



海近き晝の酒場にありながら誰が子を接吻の音を  
立つるは

さけぶらく涼しき色の酒もてて海の少女をさかな  
に飲まむ

しろがねの砂を踏めばかなしみの歌聴こゆなり海  
近うして

誰が船ぞ櫓の音みだし漕ぎゆくはその櫓の音に心  
みだるる

おどろかす鷗もあらぬしづけさにその接吻の長か  
りしかな

濡髪は夏をはるまで乾くことあらじと君をのろひ  
しや誰

眇目の山莊守がわが君をおもふて病むと聴くはま  
ことか

かの宵の露臺のことはゆめ人に云ひたまふなと云  
へる君かな



ちかふらく都にゆかばまた會はむひと夏のみの戀  
ははかなし

酒甕に凭るを知らざるたをやめは砂濱船に凭りて  
かたりぬ

窓砂に身を投げ伏して涙しぬ胸の痛みを思ひ知る  
時

鎌倉のまぼろしいまも目に映る君がくちびる君が  
たたむき

### 酒ほがひ

少女云ふこの人なりき酒甕に凭りて眠るを常なり  
しひと

酒びたり二十四時を酔狂に送らむとしてあやまち  
しかな

思はれしわれをにくみて放ちたる汝が矢は逸れて  
酒甕を射る



屠らるる二の世のわれぞ目に映るわが酒肆さかみせに夕日  
さすとき

一秒のよろこびをのみたのしまむ逸樂いらくびとの生涯  
のごと

少女らに面かほを背けてわれは來ぬ酒をおもへるわざ  
はひの戀

覺めしわれ酔ひ痴れしわれまた今日も相争あひまをひてね  
むりかねつも

酒の國わかうどならばやと練り來こ貴人きじんならばもそ  
ろと練り來こ

われを見て酒のにほひすあなけうと疾く往いねと云  
ふ聖にも會ふ

あはれいま眠りの箱の蓋ひらく時とて人は酔ひ倒  
れたる

かの君の涙の酒に酔ひけるよ人は知らじな酒のか  
なしみ



酒みづきさなよろほひそ躑かば魂を落さむさなよ  
ろほひそ

杯をふくむ子瓶をうちふる子いとおほくして宮う  
ち日さす

諾とも云ひ否とも云へるまどはしき答を聽きて酒  
に往きける

杯のなかより君の聲としてあはれと云ふをおどろ  
きて聽く

わが胸の鼓のひびきたうたらりたうたらり酔  
へば樂しき

まなさきに蒼蠅と見しは獅子なりきものあやまち  
し酔びとの目よ

綺語の子と狂言の子のなかにゐて酔ひてその日を  
送る子なりし

君なくばかかる亂酔なからむとよしなきひとを恨  
みぬるかな



よき玉の琥珀に似たる酒のいろあまり見惚れてわ  
れを忘るる

かかる世に酒に酔はずて何よけむあはれ空しき恒  
河砂びとよ

酔びとよ悲しきこゑに何うたふ酔ふべき身をば歎  
けとうたふ

さな酔ひそ身を傷らむと君云はず酒を飲めども寂  
しきかなや

酒を見ていかにせましと考ふるひまに百年千年過  
ぎなむ

戀がたき挑むと云はれおどろきし弱き男も酒をた  
うべぬ

酒肆に今日もわれゆくヴェルレエヌあはれはれと  
て人ぞはやせる

な戀ひそ市の巷に酔ひ痴れてたんなたりやときた  
る男を



甕越みかこしにももの云ふひとの濡髪をただ見てあるにこころよろしき

博打はくちたずらま酒酌しやくまず汝等なむらみな日をいただけど愚かなるかな

悲しみて破らずと云ふ大いなる心を持たず悲しみて破る

夏の日の眞晝の辻の打水と酒を打たましつれなきひとに

事わかず疑ひしげくなる時は壺の口より酒にもの問ふ

おどろきて一夜のあひだ隠れたるみそか男は酒甕を出づ

溺れたるわがわかうどはあやしくも黒髪いろの酒を酌むかな

いろいろの酒甕どもにかこまれぬ遁げあたはずばいかにすべけむ



覆へす酒の甕より出でたるは誰にかくせし誰の艶  
書ぞ

鐵橋のほひも酒をおもはしむ秋の日さむく河に  
沈めば

黒髪の朽つるにほひか或はまた醞醞ちんちんの酒の古きか  
をりか

酒ほがひ蜜蜂すかのごとく酔ひ痴れて羽な鳴らしそ君  
もちはすに

よわきかな戀に敗けては酒肆に走りゆくこと幾た  
びかする

かなしくも涙を誘ふ君が歌酒がうたふにあらずや  
と聽く

夕みぞれ都のなかの放浪につかれたる子が酒おも  
ふ時

酔びとは船へかへらずさかなすと霞のなかに鯉鱗  
を切る



酒甕のうへあざやかにしるすらくわれの秘密はこ  
のなかにあり

酒に酔ひ忘れ得るほどあはれにも小さくはかなき  
われの愁か

満つる時よろこび來り満たぬ時かなしみきたる酒  
甕を置く

枯薔薇落つるひびきにおどろきぬ夜半の酒場のし  
づかなる時

魂をさかなとなしてわれ飲まむ酒のかをりに死を  
思ひつつ

歡樂の墓のごとくに思はるる酒場のうらの甕のか  
らかな

賭場あらし伽羅場あらしのさんしたのポヘミアび  
とを忘れかねつも(以下八首獨逸びとフリッルンブに)

酒よりも女を好み女よりも鴉片を好む人なりしか  
な



汝<sup>な</sup>とともに淺草寺の山門に昂<sup>すほる</sup>星<sup>ぼし</sup>をばながめしこと  
あり

うたびとのゲエテの家の下男よりすこしまされり  
フリッルンブは

まどろすにややまさりたる服を著て都を練るが常  
なりしひと

獨逸びとルンブを送る宴にもなほ吹き入るや秋の  
夜の風

伯林<sup>べりん</sup>の戀のたよりを書きおこすインキも薄くなり  
にけるかな

いまも汝<sup>な</sup>は廣重の繪を眺めつつ隅田川をば戀しと  
おもふや

まどはしき酒のあぢはひわが友の詭辯のごとくお  
もしろきかな

杯にたたへられたるうま酒のゆたのたゆたにただ  
よへる時



杯を上げよと云へばみな上げぬ酒あもしろし斯くの如くば

歡樂はあまりに悲し酔ひし目に玻璃窓の外との夜を見つむる

酒に酔ひ涙をながす逐はれたる婆羅門のごと涙をながす

寂しさの極まるどころ酒甕と劍とありき何の謎ぞも

いづれをか樂しと云はむよしとせむ酒に酔へると戀に酔へると

酒甕のなかに溺れて死なばやとふとしも思ふ酔へど寂しき

しみじみと見れば悲しき酒のいろわれの心のいろやうつれる

友をかし酒にも倦きてこのごろは髑髏むくわなど蒐あつむると云ふ



酒に酔ふ否いかかなしみに酔ふと云ふ争ひをかし果て  
しなれば

杯のなかに聲ありあはれ汝なを思ふ子なしと云ふが  
悲しさ

酒甕をくつがへすときふと胸に來しころよさ誰  
に語らむ

杯を七つならべて占ふは友との戀の勝ち負けのこ  
と

うらざりし女ごころに似て苦き酒は汲まじと云へ  
ど酔ひぬる

そひきたる女はやがてかくこそと友の抛つ杯もよ  
し

涙もてつくりし酒に酔ふときのみだれ心地や寂し  
からまし

いにしへの萬葉集のうたびとも酒を讃たへぬわれも  
たたへむ



酒甕のなかよりわれの春は来るこの堪へがたき寂  
しさは来る

大跨に銀座通りを歩むときわれも酒場の猛者か  
と思ふ

醉泣す酒に酔へるにあらずしてまづかなしみに酔  
へる男は

(74)

わかうご

薔薇の香にほひきたりぬわかうごが涙ながしし物  
語より

ややありてああえや忘るその夜をとわがわかうご  
は潤み聲しぬ

沈丁花汝と戀をば争ひし日のにほひよと友さりげ  
なし

(75)





あな聊爾戀を競ふと立つ人をかりそめながら目の  
ほかに置く

百年も覺めざるごとくよそほふかおのが若さにま  
こと酔へるか

あなうつけ見恍惚聞き恍惚いつしかもわれを失ひ  
なほ酔へるかな

はしり來ぬかづく衣は猩々緋猛然として君が家に  
入る

わかうどは幸ひなれやまほろしに丈の黒髪まなさ  
きを過ぐ

君を得ついでことほげとわが呼びし聲に應じてか  
のかたき來ぬ

たからかに勝ち誇りたる笑ひこそ世にたぐひなく  
寒かりしかな

ただひとつ黄金の蜂ぞわかき子の胸のかをりにい  
ざなはれ來し



われ兼ねむ優にふるまふ戀人といとさかんなる酒  
場の猛者と

戸のうへに白墨をもてしるすらくあはれうつくし  
この家の少女

やはらかき腕に凭りておもへらくたはむれぬ子は  
趣あさかり

伽羅の香のみなぎるなかに跌座あぐらする人も歎けと秋  
のきたれる

うらわかき都びとのみ知ると云ふ銀座通りの朝の  
かなしみ

われゆきぬ驚破おどろと云へる言葉をば日に七度もさけ  
ぶ男と

すかんぼの莖の味こそ忘れぬいとけなき日のも  
のの悲しみ

黒髪の香にも倦きぬともものうげに眩ける子のあは  
れなるかな



遅ましき男の肩に凭るときの心頼みを忘れたまふ  
な

珈琲の香にむせびたる夕より夢見るひととなり  
けらしな

少女みな情を知らずいまははや末法の世となり  
けるかな

いざなふは夕蝙蝠のはばたきかかの遊び屋の店清みせすが  
蚤がか

かにかくに正體もなく日を送るめでしれびとをさ  
はな咎めそ

兄むすこそその名はをかしドンファンドンファンのらりくらり  
と時を送れる

一夜妻髪はなにゆる長さかとあやしみしより思ひ  
こがるる

いにしへはころべころべと繪を踏ますいま戯れに  
わが足踏ます



この君は男を毘に落さむとはかるやからに似てお  
はすかな

放蕩のあはくかなしくころよきその味ひを忘れ  
かねつも

わが少女水夫の腕の入れ墨のされかうべをも怖れ  
ずと云ふ

思はずと云へば劍を取り出すおそろしき子ととも  
にねむりぬ

あやまりて君が心のありかをば無頼ぶらいの子にも教へ  
けるかな

ふところに拳銃ひんじゆうあるをわがまへのたはれめどもが  
知らぬをかしさ

曇りたる君の心をしのびゆく兩國橋のあけがたの  
月

或る家の窓よりわれに投げつけし簪かんざしに似る君のか  
んざし



隼のごとくにゆきしはやりをの戀をあやぶむ窓に  
もたれて

大河の船の汽笛を聴くごとにかなしと云ひぬ夜の  
女は

あなをかきやはらかき手にとらはれて亂行ものも  
酒をたうべず

おもしろし六が二となる賽の目もかのたはれめの  
心變りも

やはらかき腕かひなを見れば胸躍るわがふるさとに歸れ  
るがごと

運命の腕とすればやはらかし枕とすればあまりつ  
めたし

その男會へばかならずああ切に元祿の世を戀ふと  
云ふかな

蘭蝶を聴きつつかかる時死ぬも惜しからじと思  
ひ初めにし



さりげなくものがたりして美しき仇とともに一夜  
ねむりぬ

すてばちの身をたはれめのまへに投ぐわが世のす  
べて終りたるごと

ただひとりさらばと云ひて戸を出でぬ如月の夜の  
雲のなかに

### 後の戀

君見ずとかたく誓ひて來しものをもの狂ほしやま  
た君を見る

ひと夏のうすき縁えんをかなしまむ鎌倉びとはあはれ  
ふかかり

黒髪はもとの黒髪くちびるはもとのくちびるなつ  
かしきかな



夏の夜のうす紫のうすものうすき情の君を忘れ  
ず

君と別れその日その日を歡樂に耽る男となりにけ  
るかな

この幾年いづこに往きておはせしや問へど笑ひて  
答へたまはず

別れても男はさすがおほらかにふたたび會はむ日  
を待ちしかな

われと別れ今日までひとり荒山の窟のなかにおは  
せしものか

たはむれに疲れし獅子が眠るごとしばしわれらが  
戀もねむりぬ

ただひとり三年のあひだ遠海の黒き帆を見ておは  
せしと云ふ

君にちかふ阿蘇のけむりの絶ゆるとも萬葉集の歌  
ほろぶとも



後の戀まへの戀よりかなしきはこのわが君に熱の  
なきこと

わが心むかしのごとくよろこばずいたましきかな  
君を抱きて

いかにせむわれはいづれとうち惑ふ戀の宴か戀の  
逮夜か

あなけうと悪性ものの兄者人が君を思ふと云ふは  
まことか

そのかなしみいまは微かになりぬれど消ゆるばか  
りになりぬれど猶

歸らむとまたくりかへす君が聲あはれいくたびい  
づこへ歸る

やうやくに心は安し憂き戀のなごりに涙なほ落つ  
れども

ひとたびは獸とまでにののしりし君を忘れず口惜  
しけれど



わが戀はながく眠りぬふと覺めてなほうつくしき  
君におどろく

ただひとつ君をかなしむ目の縁のおしろいやけの  
薄鉛うすなまりいろ

われ勝ちぬされどをかしき君なれや人にほこれり  
われに勝ちぬと

海見るはむかしの戀を見るごとし日毎夜毎に海を  
ながむる

砂まくら君を思ひてかなしみぬ大海原はなほもか  
はらぬ

語りつつかたみに憂しと思ひぬ覺めたる人と覺  
めざる人と

かなしみの家と扉にしるしたる館のまへをたもと  
ほる君

たはれをは別るときも高らかに笑ひてあれどさ  
りげなけれど



かにかくにわが身のうへはあやうかり女の難に劍  
の難に

砂やまの麓にのこる足のあと戀の足あとなほ消え  
ずけり

斑猫はんみヤウの家とおもひてまた入らず招きたまへど誘ひ  
たまへど

秋の風肌寒うして堪へがたき時のみわれを思ひ出  
づる君

うつくしき悪魔と君をあざけりしむかしの罪は許  
したまふや

ただひとつ汝なんぢを怖るわが少女つねに腕がざる黒の  
手套

何ゆゑかはじめて君を見しごとくかりそめ言も打  
出かねつも

昨夜の九時かへりたまひし後書くといとうつつな  
き消息は來ぬ



酒の香に染みし心もよみがへるながきわかれの君  
と思へば

杯をとどめし君がしろき手はあたら筑紫の芹を摘  
むかな

築地なるわだつみ色の館より出で來し去年の君を  
こそ思へ

とこしへに別るる君にあらねども別れたる夜の氷  
雨をおもふ

冬の夜の雲のおとを聴きながら筑紫をさして往け  
る君はも

羅馬より那保里に急ぐたをやめに似たる姿を吾妹  
子に見る

筑紫ゆき去年わが靴に踏みにたる土をし踏まばこ  
ころ躍らむ

のろはれし少女は今日も悲しげに有明の海の遠鳴  
を聴く



歸らずはながく筑紫に君あらばまた相見ずばいか  
がすべけむ

百束ももつかの文をわが手に残し置きてながく都にかへら  
ぬ少女

しめやかに降りつもりたる雪となりて君が心は一  
夜のこりぬ

冬の夜の濠にただよふ月魂つきごころかほのかに君を思ふこ  
ころか

その夜より午後の八時の時を忌むかなしき時を思  
ひ出づるゆゑ

不知火の筑紫の海に棄てにゆく君が心の惜しくも  
あるかな

危ぶみぬ筑紫少女はその胸を水甕のごとおもへり  
と云ふ

かにかくにわが身の上やしのぶらむ五島の海の秋  
のゆふぐれ



かなしげに君はいそぎぬ筑紫路に殞もがりをつくる少女  
ならねど

歡樂を（あはれ二人が夢の夢）追ひゆきし子のか  
へり來ぬかな

のろはれし少女ひとりを救はむと思ひ立ちにし戀  
ならなくに

消息にいはいくその夜の停車場の涙かわかずありて  
かなしき

いづれともわかなく君はながむらむ鎌倉の海長崎  
の海

うらがなしじやがたら文にあらねども涙もよほす  
君が消息

ふるさとを筑紫となしてわれ往かむふるさともな  
き戀のわかうど

もの惱みものかなしみに暇ひまもなき戀の遍路のあは  
れなるかな



かへり來と云ひし最後の言葉に心すべてを賭く  
といへども

おとろへし君が姿を見むために生きながらへてあ  
らむこの身か

その秋をなほも思ひてかなしみぬそのち三たび  
蘆の花ちる

昨日まで

たそがれは遠き秩父の連山れんざんをながめて君を思ひけ  
るかな

かにかくに五月は悲し忘れたる狂ほしさをばまた  
も覺ゆる

いと微かにおとづれきたる夏の呼吸われにかかり  
て惱ましきかな



すさまじき都のこゑを聞きながら夜も寝ずひとり  
君を思ひぬ

門出でて何處ともなく歩みゆく毎のわれをわれ  
もあはれむ

蠟燭は月草のごと燃えにけり五月の夜のわかうど  
の窓

鎌倉の海のごとくにひるがへる青草に寝て君を思  
はむ

わが窓に緑のいろのかなしみが迫る眞晝となり  
けらしな

鳥啼きぬかすかに夏の鳥啼きぬ君の聲かと耳をう  
たがふ

おもひでは雪を戴く遠山<sup>とよやま</sup>を野の果に見るごとくか  
なしき

野を遠くかなしき歌をうたひゆく子ありと君に書  
きしを思ふ



日もすがら林のなかをさまよひぬ昔のごとく君に  
會ふやと

おそろしき夏のちからはわれに來ぬ心も燃えて肉  
むらにゆく

夏草のにほひを嗅ぎてあたたかき腕もとむるあは  
れなる子よ

日はつよくところを燬きぬ胸渴くわれをいやさむ  
唇もがな

野は乾き草の實枯れて蟲死にぬ戀もほろびむかか  
る夕に

君が家のいとあはれなる屋根の草その草よりもあ  
はれなる戀

夏鮎鳥をうかがふ夜は更けぬ誰が子ぞわれの門を  
たたくは

ああ三年まへの夏こそ忘れぬ君よ破船よ海よ月  
夜よ



かなしみもよろこびもわが一生のすべてあつめし  
夏を忘れず

罌粟の實を啄む鳥は死ぬと云ふその鳥のごとわれ  
も死なまし

ああ夏にまたもなりぬと云ふことがすでに悲しき  
戀をかたりぬ

都にて潮鳴を聴くあやしさに夏ごとに會ふ子とな  
りしかな

君思ふころもやがておとろへぬ灰色の夢を見る  
がかなしさ

ともすれば酒に通るるあさはかのわれを棄てむと  
思ひ立ちける

今日よりはただ思ひ出にのみ生きむかくおもふと  
き涙ながれぬ

夏來れば君が腫の解きがたき謎のやうなる光さへ  
見ゆ



六月と云ふ聲聽きてかなしげにうなだるる子を誰  
とおもふや

歸るべき家も忘れぬうつくしき夜を見むとて出で  
往きし子は

鎌倉の海を見るごと東京の街を見むとてい往きけ  
るかも

夏は來ぬありとあらゆる生きものが目覺むる時と  
われも目覺むる

誘惑はわれにもきたる六月の風こちよき街をあ  
ゆめば

やうやくに夏の匂も高まりぬかくてわれらが時と  
なりぬる

たはれをとわれを罵る人おほく夏も悲しくなりに  
けるかな

このごろは日毎銀座をおとづれぬ青柳もよし鋪石  
もよし



珈琲の香にむせびつつものがたるわが戀がたり聴  
くひともなし

大河の船の汽笛にさそはれて橋だもとまで來しや  
月の出

朝おもふことも夕はうらざりぬかかる子にこそか  
なしみはあれ

かへりみれば華やかなりや半生は酒と女のなかに  
送れる

酒ありき女もありき昨日までわが見しながき夢の  
なかには

われにそむき唇さへもこばみたる女に夢を興へた  
まふな

ああ月夜弄ぶべき指もがなつよく吸ふべき唇もが  
な

夜となりてひとり眠ればあはれにもわが魂のさめ  
ざめと泣く



昨日まで何をかなしみうなだれて都のなかをさま  
よひし子ぞ

またしても郊外に來ぬ遠山の雪のひかりをえやは  
忘ると

いくたびか溺れいくたび悔いにけむわれをほろぼ  
す酒よ女よ

酒女すべて空しと知りしよりわが世寂しくなりに  
けるかな

かかる晝かかる夜つづき半生をつくりけるかとわ  
れを歎きぬ

ただひとり都のなかに往き暮れて浪費をおもふ秋  
のゆふぐれ

わかうどは昨日は昨日今日は今日その日その日に  
生くといへども

こころよりよろこびこころより愁へ生甲斐のある  
われとならしめ



君を棄てわれをも棄てて現身のなにゆゑになほ生  
きむとすらむ

ふとわれの額に暗き影さしぬ昨日の夢やおそひ來  
りし

酒甕を碎かむとしてためらひしわれをあざける聲  
の聴こゆる

ああ銀座こころ浮かれて歩みしもいつか昨日とな  
りにけるかな

かなしげに林のさけぶ聲を聴き一夜ねむらずもの  
思ひ居り

かなしくもわれいたづらに生きてありみづから殺  
すすべを知らねば

今日よりはまた蠟燭にしたしまむわがなつかしき  
郊外の家

蠟涙のながるる音す彌更にわがかなしみのつる  
あかつき



つくづく昨日のわれを思ふときはや夜明けぬと  
燭を消すとき

われなりきうなだれて往くわれなりき朝戸出の子  
も夕戸出の子も

山遠し見るに涙もさしぐまるわがかなしみはかし  
こより來る

野に出でて莠取の子を見るときもなほ君がことを  
忘れざりけり

ああ遂にわれひとりなりいつはりの戀を戀として  
ありしとがめに

春來れどなぐさめもなくうづ高き君が文など數へ  
くらすも

またわれのわかき心や燃え出でむひたすら夏の來  
るを怖るる

夜もすがら思ふは昨日うつたなくわれにもたれし  
人の身のうへ



汝なれにのみわれの訴うたへし戀がたりその戀がたりひと  
に語るな

新しきちからをわれに與へよと云ふべくここに君  
のおはさぬ

さあれなほ日毎都をおとづるるわがならはしもあ  
はれならずや

わがこころいたく傷つきかへり來ぬうれしや家に  
母おはします

何ゆゑにかばかり悔をおぼゆらむ弄びたる戀なら  
なくに

世のつねの戀のごとくにいつとなく忘れはつべき  
君にやはあらぬ

夏ちかしやがて都の夕すずみわが噂など聽こえ初  
むらむ

戀のためわづかに生きてありし身の戀失ひて何に  
生くべき



棄てたるか棄てられたるか  
いづれともあれその君  
のいとしいかなや

世を厭ふ否々君を厭ふ  
いなみづからをみづか  
ら厭ふ

寂しさに堪へがたきかな  
かくかこちその日その日  
をあらむわが身か

おとづるるひとあらねば  
わが門は青蓬もて蔽は  
れにけり

蓬の香黒髪の香を思は  
せてそぞろに君のしのば  
るかな

棄てて來し酒よ女よ夜よ  
夢よ昨日と云へどはるか  
なるかも

別るべき時こそ來れとお  
ろかにも君をあざむきわ  
れを欺く

歡樂ののちのかなしみ來  
るらし胸あやしくも痛み  
初めつつ



みづらみの山椒魚の夢にさへなほおもひでのあり  
けるものを

樂しかりし夜を思ふことすらにだに許されぬ身と  
なりにけらずや

角筥の聖者も老いぬたたかひを非なまするごとく戀を  
なみする

かなしみに疲れはてたるわが身をばしづかに寄せ  
むまる肩もがな

逃 亡

東京の秋の夜半やはんにわかれ來ぬ仁丹の灯よさらばさ  
らばと

あはれにも魂いたく傷つけし逃亡の子をとがめた  
まふな

淺草の鳩も寂しく思ふらむ日毎見慣れしわれを見  
ぬため



うつくしき夜のいろこそ忘れねああ東京よすこ  
やかにあれ

おそろしき都をのがれ來しと云ふ戀もいのちも棄  
て來しと云ふ

このつぎは露西亞へ遁げむかく思ひひとりかなし  
き笑をもらしぬ

女みなみにくく見ゆるかなしみか酒みな苦くなり  
しなげさか

酔ひしれし凄艶の子のうつくしや都おもへば目に  
浮び來る

浪の音かすかに聴こゆただひとりもの思ふ子を何  
に誘ふや

あはれなる新内ながし過ぎゆきぬ避暑地の街の秋  
の夜更けに

東京よひとりおもへば青ざめし女のごとき汝が顔  
も見ゆ



宗演はなほすこやかにわれを見て笑ひたまひぬ戀  
はいかにと

酒にがく女みにくしこのごろは心しきりに獅子窟  
にゆく

鎌倉の扇が谷のわびずまひふたたび君と住むよし  
もがな

秋の日はいづこもおなじ神田なる琅玕洞も寂しか  
るらむ

今日よりは人と遊ばず海に往きうろくづどもと戯  
れてまし

いまごろは紫朝は何をうたふらむそれのみ夜毎思  
ふかなしさ

逃亡は君の咎にはあらざりきかの東京ぞわれを追  
ひける

傷つきし魂遂に癒えがたく秋もをはりとなりにけ  
るかな



凡骨もすこやかにやなほ刀を忘れて酒をたうべ  
ありくや

海を見てしばし愁を忘れけりいとあはれなる逃亡  
の子は

東京よ汝を好まずなにゆゑにうつくしき夜をはや  
く眠るや

逃ぐと云ふまさしく戀の終りなりそれとも知らで  
君の今日ある

冬來れば都も寒くなりぬらむ洲崎の海は薄氷のし  
て

いたましき小土佐の顔を思ふ夜も秋はさすがに多  
かりしかな

おもひでに耽りてこころ紛らさむ都戀しくなりに  
ける時

君もなし東京もなしただひとりああわれいかに冬  
を越すべき



逃亡かただかりそめの厭世かとまれふたび東京  
を見じ

さあれ猶ひそかにわれはおとづれぬ銀座あゆめば  
涙忘ると

かなしくも東京を棄て君を棄てわれとわが身を棄  
てにけらしな

そはなほも昨夜のごとくに思はるる都大路のあり  
あけの月

かなしみに堪へて遁げたるわれなりきかの君をの  
みなどか恨まむ

うつくしき都の宵のうす明りなほわが胸にさすと  
思へば

なつかしき人形町の夜の露はなほやはらかく君を  
つつむや

日本橋のうつりかはりも悲しかりわが身のうへに  
思ひくらべて





いつはりの世にあるまじきわが戀とはじめて知る  
も逃亡のため

うつくしき江戸は滅びぬわかうどの悲しみながし  
戀のごとくに

玉を突く人もなきまであらけたる避暑地の冬もあ  
はれならずや

しみじみと寫樂の繪よりあぢはひし悲しみにこそ  
身をまかせけれ

由井が濱藻屑もわれを歎かしむ君が黒髪まじりぬ  
るか

なつかしき橋の名などを數ふるもさすらひびとの  
ありのすさびか

拳銃けんじゆうのあるところまで往かしめよさすらひびとの  
足のまにまに

いたづらに命ながらへあるべきや泣くべき時に笑  
む子たるべく



拳銃はかの砂山に埋め置かむ身近にあれば命あや  
うし

死ねと云はば死にもやすらむかかる夜のかかる心  
のみだれし時は

夜となれば海のどとろきおそろしく頭かぶのなかに渦  
巻きて入る

廣重の海のいろよりややすしわがこの頃のかな  
しみのいろ

秋來れば長谷ははもかなし三年まへ秋好む子の住み  
けるところ

浪の音に夢やぶられぬ君ありや思はずさけぶ秋の  
あけがた

秋の日の寂しき時はただひとり停車場にゆき人を  
ながむる

砂の丘ほのかに黄なる花咲きぬ愁ふる人のなぐさ  
めのため



海に入り死なむと書きし君が文われにとどきて秋  
は來にけり

冬の鳥一群きたるそのむかし君と泣きたる岩の方  
より

鎌倉の冬はもかなしかの君のかの山莊も門を閉づ  
れば

紅 燈 行

紅燈の巷うちたにゆきてかへらざる人をまことのわれと  
思ふや

夏ゆきぬ目になしくも残れるは君が締めたる麻  
の葉の帯

恨まれぬ恨みぬかくてしどけなき戀の姿となり  
けるかな



酸漿まづきはやがて鳴らずもなりぬべしあまりにわれを  
恨みたまへば

悲しくもみづから棄ててあることをさばかり悔ゆ  
るわれと思ふや

君とあればいと微かなる夏の夜の遠いかづちもな  
まめきにけり

なまめきし緋のしごきよりほのぼのと歌麿の夜は  
明けにけらしな

新内の唄のなかよりぬけ出でてきたりしごとく君  
は悲しき

ややありて悲しからずや女はとうるみ聲して君は  
かこちぬ

おしろいの匂ひに秋を感じたるわがかなしみを  
知るひともなし

蟲賣はやがて出づらむ去年の秋君と買ひたる鉦た  
たきはも



紅燈のひとつふたつに誘はれて放埒の子となり  
けるかな

おしろいのうすきに似たる薄明りその薄あかり忘  
れかねつも

大川の月の出しほも近からむほかなきことを君の  
語れば

落人おちうどの身にはあらねどうなだれてわれらかなしく  
河岸をゆく

やすやすと死をちかひける女より秋のあはれを覺  
えけるかな

やはらかき腕に巻かれおそろしき死を思ふより悲  
しきはなし

源治店の路次の溝板からからとわれらを笑ふ夜も  
ありしかな

その女まばたきの數いと多く秋の灯を見るこころ  
こそすれ



秋風はつれなやこよひつくづくとわれの見つむる  
紅燈をふく

君が帯秋のひびきを立てにけり涙ながらにむすび  
たまへば

秋の夜は夢さめやすしかのひともかのびいどろの  
鉢の金魚も

かにかくに都はうれしよひやみに秋蝙蝠のちらほ  
らと飛ぶ

はなやかに日毎夜毎を送る子の君は知らじな秋の  
おもひを

忘れたる女のこともおもひ出づふと紅燈の目にう  
かぶ時

あけがたの取りみだしたる枕まで清正公せいせいこうの太鼓聽  
こゆる

冬來れど水天宮のにぎはひはまだ君ほどにあらけ  
ざりけり



薄情は冬にふさへりからかさにくす雪降らばまた  
君を見む

君おもひわかきころの躍る時冬のさむさも忘れ  
つる時

隅田川水鳥啼けば聖天の灯もまたたきぬ冬のあけ  
がた

この一夜寒さを忘れ身を忘れただ戀をのみ忘れた  
まふな

君が櫛また獺にとられけり大川端をひと夜あゆめ  
ば

帯どめの翡翠も氷る夜となりぬその胸にさへ冬の  
來ぬらむ

しみじみとももの哀れを知らしめしつれなきひと  
の薄情かも

仇なさけいとどつれなささるらむいとどわが戀  
冬に入るらむ



うたがひに狂ふわが身となりにけりありなしごと  
をひとの告ぐれば

けうとくもふとわが膝にてぼれたる君がつめたき  
空涙かな

もの思ひ君のする時麻の葉の帯さへ歎くこちこ  
そすれ

戀と云ふものの哀れを知るひとのおとしめらるる  
世にも生れぬ

いつはりに涙は落つるものかはとまたしても君は  
いつはりを云ふ

紅燈の巷に生れあきらめのかなしみを知る君なり  
しかな

仇なさけ薄なさけにも感ずるとわれやわりなく涙  
ながすも

この二人いつはり言を云ひ合ひてからくも今日の  
戀をつづくる



偽りの言葉もうれしわが君はまことしやかに語り  
たまへば

春の夜のいたづら臥のたはれめが枕にしたる梅曆  
かな

わが膝に伏して泣かざる少女とはものを云ふべき  
やうなしとこそ

現無うつがにわれ君に寄るうつつなに君われに寄るさら  
にうつつな

それも夢これも夢とて數ふればわが世の戀は果敢  
なかりさな

ああ幾夜命をかけて會ひにけむあはれたはれをあ  
はれたはれめ

雪のなかに夜の明くるまで立たしめむ薄情者の懲  
らしめのため

いと弱き女ごころにほだされてわが戀いよよ深ま  
さりゆく



別れむとしてまた別れがたき夜の趣おもふ君と別  
れて

子を思ふ善知鳥やすかた君思ふわれともどもに切  
なるかなや

腹黒の君の大叔母の白髪さへもののはれのなか  
にかぞへぬ

君情無まづかく書きしわが文はしどろもどろとな  
りにけらずや

いかづちはやや遠ざかり隅田川われらがために流  
るるが見ゆ

頬を寄せて思ふは昨日今日のことゆく末かけしか  
ねごとのこと

空涙ながせしひとの黒髪は蓬となれとのろひける  
かな

脊負揚のなかの文がら重からむこのごろとみに數  
まさりつつ



やすやすと戀もいのちもあきらむる江戸育ちより  
悲しきはなし

やるせなさそれもはかなきなぐさめに黄楊の横櫛  
すればなるべし

おしろいもいささか襟に残るらむなほおもひでの  
残れるがごと

怪談も君が口より聴くときは戀がたりよりなまめ  
かしけれ

清元の稽古もさがる日となれば女ごころの悲しか  
らまし

紅燈のちまたにゆけど濡れずと肩そびやかし云ふ  
は誰が子ぞ

おしろいのうすきをこのむ薄なさけつれなかりけ  
る君を忘れず

たとふれば洗ひ髪吹く大川の河かぜに似るうすな  
さけかな



いつの日のおもひでならむ黒襟と黄楊の横櫛まほ  
ろしに見ゆ

おのづから差櫛折るる日ありともわれの心をうた  
がふなゆめ

深く戀へばいよいよ深くうたがはるはてなく君を  
うたがふも戀

やはらかに君の心をうるほはすうたがひならばす  
るもよからむ

うたがひもほのかに胸に来るときは沈丁花など嗅  
ぐこちする

思ひ寝にきのふは寝ねぬ今日はまた悲しさあまる  
恨み寝に寝む

黒襟は君にふさはじかく云ひし言葉のために別れ  
たまふや

別れむとまづ云ひたるは君なりきとりとめのなき  
あらしの後



音立てて君が横櫛落つるときはじめて秋と思はれ  
しかな

秋ちかし麻の葉の帯そら解とけてあなしどけなと云ひ  
し子おもほゆ

戀知らず情知らずのうきひとは三味線堀の秋に棄  
てばや

黒の襟黄楊の櫛などつねにして鏡花ごのみの君な  
りしかな

かなしみも化粧をすれば忘ると君は云ふなり春  
のゆふべに

あしろひはいづれかうすきいづれ濃き春の女よ秋  
の女よ

浪華なる與兵衛と云へる極道ごくどうがしたることをもわ  
がごとく云ふ

やや似ると君をおもひぬ西鶴の好色庵の女あるじ  
に



女らの空涙とはことかはり熱くも頬をばつたひぬ  
るかな

酒も憂し女もかなし紅燈のちまたは春も秋かぜや  
吹く

### 浴泉記

君あれど悲し日あれどうす暗しかくて都を厭ひ初  
めにき

むしろわれら都を棄ててこの谷に鶴鴿のごと住む  
べかりけり

ここに來て涙もよほすこと多し悲哀の谷と名をば  
呼ばまし



浴泉記書かばやとしも思ふかな悲しきことの胸に  
あまれば

あたたかき泉を浴みて忘るべきかなしみとしもこ  
れを思ふや

ただひとり湯河原に来てすでに亡き獨歩を思ふ秋  
のゆふぐれ

泣かしめよわれこの谷にかなしみを忘れむとして  
來しにあらねば

鼯鼠こぶねの巢ありとわれをあざむきて山に誘ひしかの  
少女はも

たそがれの湯槽にあれば玻璃窓に黒き猫來てわれ  
を凝視みつむる

浪花節の梅車かかれり往かずやと女けうとくわれ  
を誘へり

あなけうと山火の灰や降ると云ひ障子をしめぬ君  
はさびしく



ああ月夜瀑はあれども君なくばおとづるる甲斐なしと歎きぬ

山火見ゆ夜の空あかしかかる時ひとしほ切に君をおもほゆ

たそがれは馬盗人を追ふこゑとともにせまりぬわれの窓にも

冬ちかしかの遠山のいただきにはかなきほどの白雪もがな

誰ぞと云ひ障子あくれば縁側にしよんぼり君のおはしけるかも

もの云へば泣きもの聴けばさらに泣くかなしき君が病みあがりかな

夜は深しかつては蘆花も聴きにけむ慈悲心鳥の鳴く音聴こゆる

そのむかし悲哀の谷とわが呼びしところにありて君を思ひぬ



人の世の掟も知らぬ二人なり鶴鴿のごと今日もあ  
そばむ

時ならぬ杜鵑トビのこゑす湯の宿のおそろしき夜の冬  
のあけがた

わが君のあつき涙に書きさしのわが浴泉記濡れに  
けるかな

あるときの君とわれとの秘めごとを山のみ知れば  
山を怖るる

悲しやと君のかこてば山かぜもかなしき雪をもた  
らして來ぬ

あたたかき泉を君と浴みしのみそれより後のこと  
は知らずも

かのひとの湯河原日記おもしろし戀と云ふ字のな  
き日あらねば

雨を見る雨にけぶれる山を見るかくてはかなく君  
が文見る



湯河原や雨のひと日の日ぐらしに戀がたりする夢  
がたりする

山見れば山に雪ありしかすがにわれに愁のなから  
めや冬

そのむかし呼び覺まされて君と見し山火事の夜の  
空に似る空

山火事に巢を焼かれたるあはれなる山鶯に似たる  
わが身か

君は湯に山うぐひすは山の巢にわれは夜床よとこにもの  
を思へる

西鶴のものがたりにもはや倦みて君を思ひぬ雨の  
日ぐらし

浴泉記ありのすさびに書くときは紅樓夢よりをか  
しからまし

今日會ひて明日は別るるあぢきなさ戀もはかなき  
湯河原の冬



夜の二時に君が涙をあらひたる湯槽と聽けばすさまじきかな

もの思ひしばしつづけてゐるうちに死を思ひぬ湯にか入らまし

湯にひたり海にひたるとうたがひぬその黒髪は海松房に似る

うつくしき鶯堂まがひの文字をもて君が書きたる浴泉記はも

片戀

黒腫わがまへにある黒ひとみそのためにこそ死ぬべかりけれ

思ひ死あてがれ死に死ぬる身か悲しき戀にほろぶべき身か

ひと笑めばわれも笑むなり強ひてこの悲しき戀を忘れむとして



うたかたの戀かもすると嘲けられわれ堪ふべしと  
思ひたまふや

浅草の観音堂のお神籤みくじに凶と出でたる戀にやはあ  
らぬ

君ならで観音堂の鳩にのみ春の名残りの惜しまる  
るかな

かなしみに堪へがたければ走りたり雷神門に霰た  
ばしる

長崎の鳥はなさけを知らぬ鳥浅草寺の鳩のごとく  
に

人間の弱きところを持ちたればひたぶる悲し君を  
思ひて

これやこの往くもかへるも浅草の観音堂にかかづ  
らふ身か

鳩見ればあはれに悲し今やかか君よりも深くわれ  
に親しむ



ああ未練かかるうれしきかかる憂き思のほかにあ  
りと思ふや

あぢきなく別れし後の身となれば立つ浮名さへ悲  
しきものを

戀知らず情知らずのただありのありのすさびの君  
を忘れず

かの君を微塵みじんうらみと思はねど忘れがたきが恨め  
しきかな

いささかの未練はのこれ野晒のよどとなる身のはての何  
を思はむ

な忘れそ時には思ひ出でよなど未練がましきこと  
も云ひぬる

なつかしき君を思へば衣摺れの音さへそこにあり  
とこそ思へ

悲しければうらはら言もわれは云ふ君を恨まず君  
をのろはず







恨みごとすこしまじへて書く文のたどたどしきも  
あはれなるかな

君を責め君をのろふと書きし文ひと夜のうちに蛇くちなは  
となる

尋ひあまり何を書きけむ戀しやと云ふ文字のみは目  
に残れども

### 鎌倉浄土

そのむかし酒に遁れしわかうどもいま鎌倉の冬に  
のがるる

冬の海わがたましひを見るごときこちすと云ひ  
目を閉ぢにけり

風の音に耳かたむけぬかなしみにわれも吹かれて  
飛ぶこちする



君を棄て世を棄て家を棄つる日のちかきを思ふ海  
をながめて

打つは誰そわがかくれ家の門の戸を君かと問へば  
否いなとこたふる

家このまゝむし鼠の巢となりぬともよしやわが君お  
はすならねば

血を吐きて隣りの女今朝死にぬはかなしさびし鎌  
倉の冬

わが机海に向ひて据うるときすこし明るきこころ  
こそすれ

鎌倉は淨土にかあらむわれのみか釋宗演も冬ごも  
りせり

かはりしはわればかりかは砂山も幾冬経ぬれかた  
ち變りて

夜もすがらとどろとどろと鳴る海の音ばかりかは  
夢を破るは



鎌倉の七つの谷の谷隈のかなしきわれの冬ごもり  
かも

思ひわび恨みわびたるいやはてのわびずまひとは  
知る人もなき

たはれをのたはれ事にも倦きはてて鎌倉浄土戀ふ  
るなりけり

はなやかに日を送りたる身にとりて浪の音ばかり  
悲しきはなし

君戀し思はずわれの洩らしたる言葉も浪の音に消  
さるる

いつまでもこの鎌倉のわびずまひひとり寂しくあ  
れと云ふかや

君が家の犬を率ゐし朝戸出もいつかむかしとなり  
にけらずや

そのむかしともに死なむと誘はれし相模の海の冬  
のあけがた



鎌倉のわが家の屋根の草よりもはかなき戀と思は  
れしかな

夜となればひとり夜戸出をすることもこの頃知り  
しなぐさめにして

鎌倉に住むわかうどの戀慕歌れんまうたおとしめらるる歌を  
あはれめ

夏來れば君をおもひぬなつかしきかの裏山の百合  
畑かな

山百合の深きにほひに酔へるひと二人ありけり夏  
のあけがた

狂ほしく泣く子のために誘はれし海をしぞ思ふ夏  
をしぞ思ふ

夕立はあわただしくも山を過ぐ大佛を過ぐ君が家  
を過ぐ

置きてゆくひとは誰が子を朝ごとにわが門にある  
朝顔の花



鎌倉の戀はかなしゆく末のちかひも多く仇とな  
るらむ

夏過ぎて戀をたのまずなりし子の歌あはれなり朝  
顔のごと

鎌倉の戀はかなしゆく末のちかひも多く仇とな  
るらむ

夏は來ぬかの夜を思ひ出でますやなどと書きたる  
君が文かな

鎌倉や海のかよひ路いちめん撫子となる夏もち  
かづく

君が帶くれなるなるが夜目に見ゆ貝細工屋に海の  
風吹き

砂山のうへのぼれば月出でぬ君が手わが手取る  
がまにまに

うつつなく歩めば浪に濡れにけり君の袂もわれの  
袂も

鎌倉の戀をかたればひと笑ふさばかり戀はをかし  
きものか

鎌倉の戀をかたればひと笑ふさばかり戀はをかし  
きものか



はしたなくわれを打たむとしたるゆゑ紅緒べにをの草履  
脱げにけらずや

あけがたの由井が濱邊の露を踏み君やかへらぬわ  
れやかへらぬ

海風に吹かるる君が黒髪はすすしくわれの頬に觸  
れつつ

濱涼み戀になやむと云ふ君が夏瘦もせでおはすを  
かしさ

長谷寺のすすしき鐘の音とともに朝戸出するも夕  
戸出するも

朝ごとに岬に立ちてももの思ふわかうどありと知る  
や知らずや

海に倦き骨牌かるたに倦きてわかうどは避暑地少女の品  
さだめかな

蟬のこゑ涼しく聴こえ鎌倉のうら山はよし君と往  
くべく